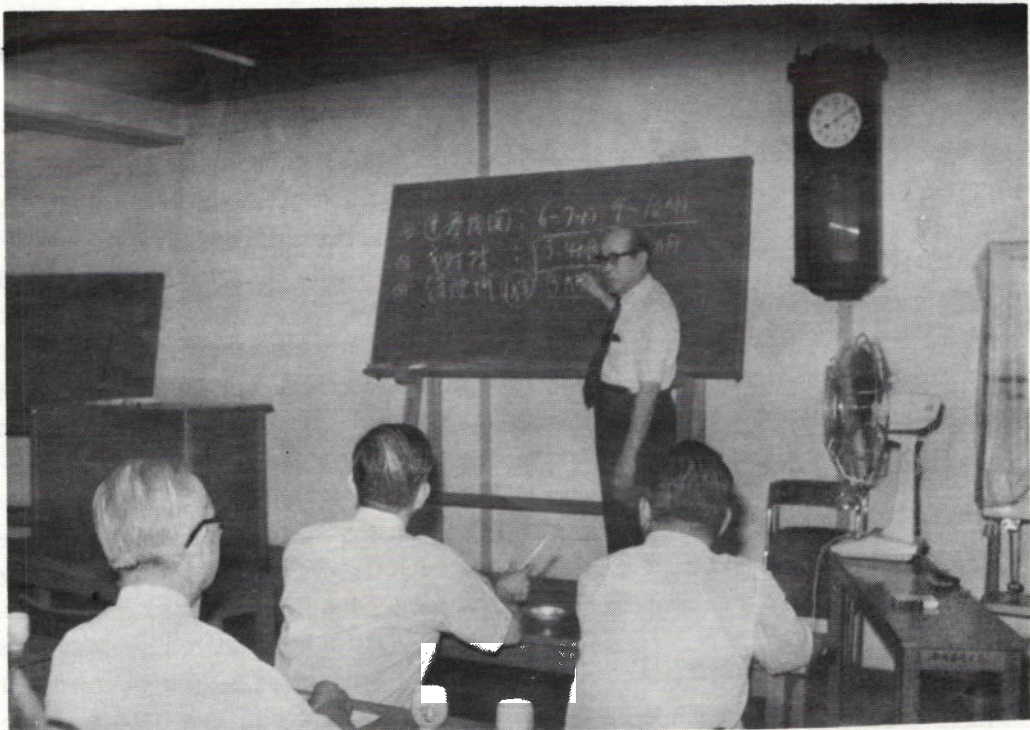


# 西多摩医師会報

第35号 昭和50年8月



## 目

6ヶ月、9ヶ月児の検診について 松島 富之助 .....	1
医師会に望む .....	5
7月理事会報告(平林) .....	6
7月地区医師会長協議会報告 .....	6
東京労働保険医療協会総会(福島) .....	6
三多摩広報部連絡会(木野村) .....	7
学術部だより(松田、西村、小林) .....	7
マムシ血清を置かざるの記 大橋 忠敏 .....	9
医師会日誌 .....	10

## 次

### 特集 終戦前後

岸田 壮一 .....	1	丸茂三千穂 .....	6
井上 文夫 .....	2	進藤 利定 .....	7
石井 好明 .....	3	坂本 保 .....	8
上田 登代一 .....	3	高水 武夫 .....	9
江口 二三男 .....	4	小泉 新策 .....	11
葉山 侃 .....	4	松原 貞一 .....	13
速水 完一 .....	5	大河原 周 .....	14

## 6ヶ月、9ヶ月児の

## 検診について

東京警察病院小児科部長

松島 富之助

今回東京都と都医師会の間で6～7ヶ月、9～10ヶ月健診を医療機関で年2回行うことに合意がされましたので、先生方の協力をお願いします。

現在行われている乳児健診はその他に市町村で行われる3～4ヶ月、12月健診があり、保健所は3才児健診を行っています。

国では1.5～2才頃の健診が必要と考えており、教育委員会では5才児の健診を入学時のチェックとして行っています。

## 健康診査と保健指導

広い意味で保健育児相談は健康診査と保健指導に分けます。昭和23年に厚生省でつくった乳児指導要領によれば健康診査は医師が行い、保健指導は保健婦が行う様に分れていますが、これは母性のことを問題にしていけないので、小児科医からすれば妊娠中の健康のチェックもしてもらいたいと云うことで、昭和40年に母子保健法ができました。これで医師にも育児の指導をしてもらいたいと云うことになりました。

## 病気の早期発見のための健康診査

健康診査で必要なのは疾患の早期発見であるが、発見したかどうするか、又診断のつかない病気は精密検査が必要となり、精査の結果早期の治療を必要とするものもある。健康診査の目的はスクリーニングにあり、病気であるかないか、どの位重いか、病気を見落さないために大きな網の目をはる必要がある。

## 1 心疾患

心疾患でも色々の程度のものであり、すぐに死亡に連がり治療必要なものもあるが、VSDの様に放置しても大人迄生きてゆけて、治療の必要の

ないものもあり、重いものでは手術の対象となります。

## 2 フェニケルトン尿症PKU

最近問題になっているPKUは生後2～3ヶ月迄に発見する必要がある。

これはフェニールアラニンと云う必須アミノ酸が脳中にあふれ、脳の発育を障害してPKUが起る。今はフェニールアラニンの少ないミルクができていますので、その早期使用によって脳の障害なしに治療するので、これを発見する必要があります。

PKUの発見には尿の検査(フェニチップ)を使用し、尿に10%の第2塩化鉄を落すとききれいな緑色のリングがでます。ただ血液中のフェニール焦性ブドウ酸が尿中に出るのは生後6～8週となるので、それより早い時期では発見できないことがあります。そのため諸外国ではガスリー-Gathrie法を使用している。これは枯草菌のある種類のものでその発育にフェニールアラニンが必須であるので、これを含まない培地に生後5～6日の新生児の血液を吸わせて検査のできる研究所に送ると異常のあるときだけ返事が来ます。これは血液を5mm位パンチできて培養すると大きなリングになるので、その直径を計ると血液の濃度がわかり、これは古い血液でもよい。世界的にこれを使ってPKUだけでなく、他の5つ位の代謝異常がみつかる。PKUは2万人に1人位の割合にあるので、人口100万について1つの研究所で検査すると、生れる乳児22万位について年間10例位ひっかかって来ます。地域ぐるみでこうした検査を実施することによってPKUを早く発見する様にしますが、発見がおそいと脳性麻痺が残り、てんかんが起って知能がおちてくるが、早くみつければ正常の生活ができます。

## 3 水頭症

非交通性の水頭症では出生時頭の大きさは正常でも、途中から大きくなるものがある。それを早期に発見して手術することによって、脳圧が下って知能の発達は正常となる。

#### 4 乳児点頭てんかん (West 症候群)

乳児で6ヶ月前後から起る点頭痙攣の中に予後の悪いものがあり、脳波でHigh voltageの不規則な波がでてくる。それを発見してA cthを注射するときれいに治癒します。

今度の検診でも治るべき点頭痙攣を見逃して、廃人になってしまうのを防ぐことが1つの大きな目的です。

#### 適正治療

病気を早期に発見して、適正な治療の待期を選ぶことが必要な病気があります。

#### 先天性股関節脱臼 (Lcc)

適正な発見待期は3~4ヶ月で、この待期に発見して固定をして8~9ヶ月で殆んど治癒します。発見がおくれて歩き出して跛行の症状を現す様になると、治癒は2~3才位になる。その子供は他の子供と一諸に生活することができなくなって、社会性を失った情緒の不安定も残るので、知能は普通でも正常な生活に入りにくくなる。それで3~4ヶ月健診の一つのKeypoint はLccの発見です。

#### 自然治療

放置しておいても自然治癒するものがあります。

#### 1 赤あざ (ストロベリーマーク)

乳児に現れる莓形のあざがあります。出生直後ではなく、2週間位後に現れ、これは乳児の2%に出現します。

これは治療しないでよく治癒します。治癒するとかえって熱くなったり、赤くなったりして皮膚がきたなくなる。

#### 2 斜頸

最近では筋性斜頸の殆んどものは放置しておいてよいと考えられている。1才頃になっても強い頭の位置の異常を伴って、胸鎖乳頭筋の知縮の認められるものは手術すればよい。

#### 健康的主訴

健康児の中でも必ず母親の主訴がある。それは病気と健康の谷間の様なもので、子供が小さいとか、肥りすぎとか、食事をとらない等である。最近多くなったのは自律神経の不安定さを中心にした訴えで、つかれ易いとか、乗物に酔うとか、よいっばりの朝ねぼうで朝起きられないとかである。

母親の訴えをうまく解決してやることも健康診査の付属品であり、保健指導の大事な部分である。

#### 集団指導

個別指導で効果の上らないときは集団の中で健康教育を行う。

母親学級等で健康を増進させるためには、子供にどんな生活が必要かを教える必要がある。最近家族の中に子供が少なくなって、社会に出るための訓練ができていない。遊べない子供、情緒的に非常に不安定な子供、子供の生活を通じて遊びが足りなくなったために、学校ぎらいが戦前の10倍位ふえているし、内弁げも多い。

これらを個々に指導していたらきりがないので、それぞれの年令の母親を集めて、1才児、2才児、3才児は何を考えているか、何を要求しているか、それに対して母親はどう対応すべきかを教えてやらないと、今の母親は困りきっている。母親は情報が入りすぎていることもあるが、未経験の母親が多い。今の子供は体は大きくても、精神的に未熟である。それを未熟の母親が育てている。

昔は子供が多くて外に出ると、その間でもまれることが多かったのが、今はそれが少ない。子供は遊びながら判断能力等を身につけるものである。子供の育児環境を自然に帰すことが必要である。

#### 早期新生児

現在日本では施設分娩が96%で自宅分娩は4%に過ぎない。施設分娩がよいかどうか問題があり、オランダでは50%は自宅分娩である。自宅の方が安全に生れる可能性のある子供では母親が楽である。出血その他の問題が起れば入院できる施設がある。そうした点で精神的な安定を求めるならば自宅がよい。日本では何でも施設を利用

する様になっているが、それなら自宅分娩的な雰囲気を持った分娩施設をつくらなければならない。

## 1 母乳

先づ問題なのは赤ちゃんが生れていきなりミルクをやってしまうことで、何故最初から母乳で育てる様にしないかである。

人間の子供が非常に未熟な胃腸の機能をもっている時期に、いきなりテヘロ蛋白を与えることが、それ以後の生命にどうゆう使命をはたしているかを考えれば、いきなりミルクを与える等という乱暴なことではできないはずである。

病院に入っていると、看護婦の勤務体制で人手が足りない。だから泣くのをだまらせるために、いきなりミルクを与えてしまう。誰のために看護医療が行われているかと云うことを感じます。

愛育会では絶対母乳以外のものを与えない。母乳のみで育てていると以後の羅病傾向が少なくなる。あとで足りなければその時にミルクを加えればよい。

## 2 母子同室

大きな病院では母子別室であるが、その理由は看護婦の手が足りないためである。授乳の時間が来ると10分か15分で連れて帰ってしまう。しかし母乳は1週間の間赤ちゃんを十分に観察させなければならない。そのため家に帰ってから育児の疑問が沢山でてくるが、核家族で相談相手がない。先生に聞きたくても忙しいからと相手にしてくれない。それで赤ちゃんをなるべく早くお母さんの所へ帰して、赤ちゃんがどんな日常生活をしているかをあきる程みせてもらいたい。そうしないとこれから永遠に育児ノイローゼのお母さんをふやすこととなります。

最近アメリカで離婚が多いが、離婚した夫婦の子供は非常に不幸になる。それを避けるために赤ちゃんが生れたら、早く父母に触らせる様になっている。さわらないと愛情がわかないし、そのことが何よりも大事であると考えられている。

家に帰って母親が育てる自信をつけることが早期新生児の保健指導です。

## 後期新生児

生後8日目から30日迄、この時期は家庭の生活にじょじょにならしてゆくことである。気候の変化等もあって、まだ充分社会にならずわけにもゆかないので1ヶ月の間は過保護になっても差支えないし、その中で育て方をマスターする時期である。

### 1-2ヶ月

ここで母親も乳児も健康診断を受けて、異常がなかったら積極的育児の時期で、積極的に家庭又は周囲の環境にならしてゆく。日光浴をすとか。散歩に出す、赤ちゃん体操をする、風呂も夜家族と一諸に入るとか、家族の1員として受け入れる様にする。

### 3-4ヶ月

胎児期から乳児期に移行する時期である。

モロー教授の論文によると、1-2ヶ月は反射の世界に住んでいるが、3ヶ月を過ぎると反応の世界に入ると云う。指をしゃぶるくせがつくとか、あやすとよく笑う。脳が反応を示し始めて、脳波もHigh voltageの波がでてくる。免疫もつくられて、心筋の繊維も乳児性のものがでてくる。

乳児の突然死(STDS)も2-3ヶ月のものが多<sub>3</sub>を占めている。最近Tonkinが乳児の突然死を分析しているが、それによると乳児のOro-pharyngealの構造が特異で、夜間の吸う運動がのどの奥を狭くして、赤ちゃんの夢をみる逆説睡眠の時間にそのまま窒息するという。特に母乳の乳児は殆んど死なないで、86例中3例で、他は人工栄養児であると云う。人工栄養児は吸う力が弱く、下顎を後に引く様にして吸うためにつまり易いと云う。

その他予防接種とか、離乳食を与える指導が必要となってくる。发育について、肥る赤ちゃんとやせる赤ちゃんが別れてくるのはこの時期である。赤ちゃんに個性がでてくるが、これは遺伝にあると云えます。

心臓の雑音が聞えなくなったり、出てきたりすることがある。知能の遅れもこの時期にチェックする必要がある。

心身の異常の発見と保健指導の重要な時期であります。

### 6-7ヶ月、9-10ヶ月

ここで今迄の検診で見逃されていた病気を発見する必要があり、それも医療機関でないで精検に直結しない。West症候群とか點頭痙攣、又は智恵遅れ等も発見される。

この時期の乳児の特徴は社会性と情緒の発達が生分化してくることである。5ヶ月の乳児はそこにあるものを手を出してとるが4ヶ月では手が出ない。3ヶ月では手は出ないが、さわらせておくとしばらく持っていて離す。6ヶ月になると手にとったものをとられまいとがんばるし、とられると泣きだす。

情緒の分化は生れた時は興奮だけであるが、それが快と不快に別れてくる。6ヶ月になると不快が恐れ、きらいに別れる。人見知りが出るのは恐りで、自分と親しい人との関係がわかってくる。

運動機能が知能の発達のindexとなる。

6-7ヶ月では通過率をみればよい。それはある機能のできるのは何時頃かと質問すればよい。例えば首の坐りは早い子は2ヶ月で坐るが、遅い子は4ヶ月である。4ヶ月の通過率は90%以上で、5ヶ月になって首が坐らなければ知能の発育に疑問があると考えられる。

6-7ヶ月で注意する知能の通過率は寝返りで、5ヶ月で半分、6ヶ月では90%となる。これには季節差があり、独りで坐ることも夏は7ヶ月でできるが冬は8ヶ月となる。

又心臓や脳の病気もあるし、もっと小さなことはヘルニアを見つけて指導する。

保健指導としては離乳食をすすめてもらいたい。この時期か8-9ヶ月で離乳の中だるみが起り、今迄よく食べた子供が急に食べなくなると云う波が起る。こうした時は強制しないでよい。又粒の食事をすすめてもらいたい。4-5ヶ月の子供は物を咬む楽しみはなく飲むだけであるが、6-7ヶ月では歯が生える子供が40%あり、歯がなくても歯ぐきで物を咬みたいと云う欲求がでて母親の指を咬むのもこの時期である。8-9ヶ月では大人と同じ消化のよい食品を眼の前でつぶ

して与える。

この時期の運動機能は這うことであり、9ヶ月で100%の子供が這える。最近の狭い家では這わないでいきなり立上る子供もある。

10ヶ月位になると1分間位物を覚えている。12ヶ月では3分間位覚えていて記憶力はよいし、又よく他人の真似をする。

こうしたことを見て子供の知恵の発育が正常かどうかを判定することが必要である。ただ早産児では2ヶ月早く生れた子供は2ヶ月発育が遅れやすいので注意が必要である。

(これは7月9日西多摩医師会で行われた学術講演の内容である。)

## 医師会に望む

土田 守一

会報や医師会に対する希望等何んでもよいから書いて出すように御指示を頂いて久しく、仲々に重いペンが持てずにおりましたが、ようやく思い切って日頃感じております事を、少し書くことと致します。

まず感じております事は、医師会館の移転改築の計画準備にとりかかってほしいと思います。総会や講演会などがある度に、現在の会館が狭く、広い会館、会議室の必要性を皆様も感じておられる事と思います。駐車場もなく、その他の立地条件についても今後更に不都合な事も出てくるのではないかと思います。近い将来には別の場所への移転改築が必要となってくるのは明らかな事ではないでしょうか。と言ってもこれを短期間のうちに実現し得るものではないため、そろそろ今のうちから構想を練り準備を開始するようにしたいかがでしょうか。

もう一つ勝手な寝言のような事を書かせて頂きます。今の西多摩は都心と違って、面積の広い割に病院数、医師の数が比較的少ない状態です。それ故に会員同志のより親密な互助制度が必要だと考えます。診療面でぜひオープンシステムの病院がほしいものだと思っておりますが、これは急には望めそうもありませんが、せめて現在進められています青梅市立病院の増床計画の協議会で、こ

(6)

これらの点を考慮に入れて御検討頂きたいと考える次第です。また会員相互の医療提携という事で、めったに起るものではないのですが、地震、火災、鉄道及び交通事故或いは集団食中毒等々大量に傷病者が発生した場合、一地区の少数の医師と、自治体のみならずだけでなく、医師会に於いても迅速に人的、技術的或いは衛生物質的援助を行なう必要性が出てくる事もあるかと思えます。これらについても会員相互に了解事項、緊急連絡方法等をあらかじめ決めておき、緊急の際に直ちに対応出来る体制を作っておくべきかと考えます。

## 7月理事会報告 (7月23日)

### 1. 税務対策について(会長)

会長をキャップとし副会長の協力を得て活動する組織を作りたい。青色申告会も包含して活動する。

2. 6、9ヶ月児検診に付ての覚書説明(近藤) 文章その他訂正すべき点あれば担当者に一任する事にして、覚書に付ては全員賛成、決定した。

尚報酬の配分方法に付ても検討された。

### 3. 老人ホームの医療について(西村)

社会的、医学的見地から明細書に付てのみ審査する方針の由である。

### 4. 多摩医学会の存続について(西村)

尚更に検討する事になった。

### 5. 三多摩庶務連絡会議報告(福島)

### 6. 入会申込 いづれも承認

五十嵐 敬晃先生 産婦人科 河辺セントラル医院開業 北大医学部44年卒

木暮 哲久先生 産婦人科 阿伎留病院 日大医学部44年卒

館浦 征児先生 整形外科 阿伎留病院 日大医学部46年卒

(平林信隆)

## 7月地区医師会長協議会報告

(50.7.18)

1. 三者協議会の決定について(公害医療機関でない病院、診療所における公害認定患者の医療の取扱い)

東京都医師会員にして公害医療機関でない病院、診療所においては健康保険法に基づく医療費の請求を行い、指定区はこれに基づき医療費の支払いを行なうことについて契約書及び覚書を指定区長板橋区と東京都医師会長との間で交換さる。詳細は7月23日三者協議会で決定されるので、決定次第会員に通知する予定。

### 2. 水道料金改定問題について

前回報告済みなるも、医療の公共性と医療機関の実状に鑑み、福会福祉施設として特別の配慮をするよう附帯決議をつけさせる。

### 3. 学術講演会の開催について

9月11日、9月26日朝日講堂で開催されることは通知済みなるも多数出席をおねがいする。

### 4. 毎月勤労統計特別調査の協力について

毎年労働省が行っている調査で、下記対象地区の会員の協力を願います。(50年7月31日現在1~4人までの常用従業員をもっておる事業所) 必要の向には通知済み。

1) 青梅市 東青梅2丁目、勝沼1丁目、千ヶ瀬5・6丁目

2) 福生市 志茂、福生

### 5. 第10回医療経済実態調査の実施について

毎年日医の実施しておる調査で、東京都は有床診療所 151施設 無床診療所 318施設 計469施設

### 6. 50年度関東甲信越ブロック医師会病院、臨床検査センター分科会開催について

50年11月16日(日) 於 都道府県会館

### 7. 社会保障制度審議会その他への新しい出発のためについて

印刷物到着次第会員に配布する。

### 8. 医薬分業模範地区設定について 通知済み

9. 保存血液の血液型カラーラベルについて 通知済み

## 昭和50年度 東京労働保険医療協会評議員会及び総会について

昭和50年6月20日(金)午後3時から番町

共済会館内の東京労働保険医療協会で開催されました。東京労働保険医療協会は改組后2年を経過しましたが、その事業内容について簡単に説明致します。

(1) 東京都の場合、労災保険医療報酬費は慣行料金の部分と協定料金の部分とがありますが、初診料、レントゲン料、室料差額等の協定料金の改正について東京都労働基準局と交渉し基準局長との間に協定書を取りかわし、又専門医で形成する審査部会を設置し審査し疑義に答えます。以上の事等について広報で会員に連絡をとり適正な労災医療を指導しております。

(2) 労働保険事務組合。各地区医師会に事務組合のない所ではその会員は労働保険事務を当事業部に依頼することが出来ます。現在此事業部に依頼しているのは25医師会で25医療機関となっております。自力で此事務処理をしているのは中央浅草、下谷、大森、中野医師会、北区医師協同組合、向島、葛飾、三鷹、調布医師会、杉並医師任意組合、城北医師協同組合、足立医師会、荏原医師協同組合、西多摩医師会(整理番号679事業所数22)の15医師会であります。

(3) 産業医部。近年発足しました産業医制度について会員にPRし産業医研修会を行っております。

評議員会と総会で議題となりました議案は下記の通りであります。

- 1号議案 昭和49年度事業報告承認に関する件
- 2号議案 昭和49年度収支決算承認に関する件
- 3号議案 昭和49年度事務組合収支決算承認に関する件
- 4号議案 東京労働保険医療協会会則変更(案)承認に関する件
- 5号議案 医療協会運営内規(案)承認に関する件
- 6号議案 会費賦課承認に関する件
- 7号議案 昭和50年度事業計画(案)承認に関する件
- 8号議案 昭和50年度収支決算(案)承認に関する件
- 9号議案 昭和50年度事務組合収支予算(案)承認に関する件

上記第4号は会員の資格、除名について規定しました。第5号第6号は従来は会費は均等割と診療費請求取扱い手数料でありましたが今回は此他に年会費1,200円を一律に賦課することになりました。(福島大寿)

## 三多摩広報部連絡会

7月16日(水)午後8時~10時立川ホテルニュープラザにて小平市医師会の主催で開催。

出席者は東京都、武蔵野、三鷹、調布、府中、北多摩、南多摩、国分寺、小金井、立川、東村山、小平、西多摩、各医師会の担当者31名であった。小平市医師会長大村勝一先生の挨拶で始まり、今回は特別の議題もなく、順次各医師会の50年度前半の広報活動状況の報告があり次いで医師会会報のあり方についての意見交換があり閉会となった。次回は武蔵野医師会の当番で開催の予定。

(木野村)

## 学術部だより

### 6、9ヶ月児の健診について

今年度第二回の学術講演会は7月9日夜、東京警察病院小児科部長松島富之助先生を講師として招き、近く開始される6、9ヶ月児の健康診査の要点などについてお話を伺った。当夜の演題が会員の先生方に関心が深かったせいか可成りの盛況で、あらかじめ準備した席だけではならずどんどん椅子を追加していく程であった。

以下、当夜の講演内容の要旨を紹介します。

先づ現在行われている乳幼児健診は

1. 市町村を中心として行われている3ヶ月児健診
  2. 医療機関にお願いする今回の6、9ヶ月児健診
  3. 保健所が主体となって行っている3才児健診
  4. 教育委員会が行う就学前5才児健診
- の4通りがあるが、更に2才頃までに知能の発

(8)

育の遅れなどを発見し対策を講じなければならないため、将来は1才半～2才児のあたりでもう1回健診が必要である。今回6、9ヶ月児の健診を設けたわけは、3ヶ月健診で可成りよく診査しているがそれでも洩れているケースが相当あるらしい、又医療機関でない、市町村や保健所では“おかしいですよ”といわれても精検に直結しないケースが多いためである。

次に乳児健康診査の一般的なこととして、かつては育児相談は医者の行なう健康診査と保健婦が受持つ保健指導に分れていたが昭和40年母子保健法が施行されてからはこの両者が一本化されてきた傾向にあり従って保健指導は保健婦任せというのであってはならない。乳児健康診査の目的は大別して次の3つになる。

1. は疾病の早期発見のためのスクリーニングであって疑わしいものを見つけ精査に廻すことである。又、診断がついたがどう処置したらよいかという症例はおよそ以下の基準によればよい。

(1) 早期に発見し早期に治療しなければならぬものとして、手術の対象となるような心疾患、フェニルケトン尿床、水頭症、點頭てんかんなどがある。

(2) 早期に発見したが適正な治療時期を選ぶべきものとして先天性股関節脱臼がある。

(3) 早期に発見したが放置していても自然治癒するものとして蔓状血管腫、筋性斜頸などがある

2. は健康と病気の谷間にあるようなもので、母親の訴えが主体となっているものに対する処である。例えば食慾がない、顔色が悪い、肥りすぎでないか等の母親の訴えをいかにうまく解決してやるかということである。

3. は一対一で指導しても効果があがらず、集団の中で健康増進教育が必要なものに対する指導である。例えば情緒的に不安定な児、内弁慶な児などは母親学級などを利用して指導すべきである。

次に乳児診査の月令別の要点について述べる。

(1) 早期新生児の指導として、そもそも分娩は自宅分娩が理想であるがそれが出来ない場合は自宅分娩的な雰囲気をもった施設分娩が必要であり、授乳は母乳にして、出生直後より母子同室にすべ

きである。要するに母親はこの時期に育児学の第一頁を学ぶべきである。

(2) 後期新生児の指導は家庭の生活に徐々に慣らしていくのが要点で、暑さ寒さなどの過酷な条件に慣らすためには多少、過保護になってもかまわない。

(3) 2ヶ月になったら母子共に健康診断を受け異常がなければ積極的育児を行い。家族の一員として家庭内の周囲の環境に慣らしてゆく。

(4) 3～4ヶ月児の特徴は胎児期から赤ちゃん時代に移行する時期で、それ以前の反射の世界から指しゃぶり、あやすと笑うなどの反応の世界に入ってきており、又免疫の自己産生ができる時である。肥る赤ちゃん、痩せる赤ちゃん、背の高い児、背の低い児など先天性遺伝子による個性が出てくる時期でもある。さらに今迄あった心雑音が消えてなくなったり今迄なかった心雑音が出てきたりする。つまりこの時期は心身の異常の発見と保健指導が極めて重要な時期である。

(5) 6～7ヶ月児の特徴は情緒と社会性の発達が著しく分化してくることである。この時期には乳児の不快が、怒り、恐れの実現である。又この時期の赤ちゃんは手に持っているものを取られまいとする、これは自我の現われである。この時期の知能の発達をみるには運動機能が目安となり、寝がえりが出来るかどうか、おすわりが出来るか、あるいは人見知りをするかなどをきけばよい。

この時期の保健指導として離乳指導をして欲しい。この時期は粒のある食事をどんどん進めることである。歯の生え始める時期なので赤ちゃんに歯ぐきで物をかむ楽しさを与えて欲しい。

(6) 9ヶ月児の運動機能は這うことが出来るかどうか物差になる。

10ヶ月では1分間、ものをおぼえており、又おとなのまねをする。

12ヶ月では3分間、ものをおぼえておる。

以上の事を基準として、知能が普通かどうか判定する参考にしてほしい。

以上で健診の一般論ならびに月令別の要点の講演は終り、この後、スライドを使って膈ヘルニア、斜頸、頭蓋瘍、母乳栄養、ミルク嫌い、夜泣きなどの個々の事例に対する保健指導の要点の解説が



あった。特に母親の訴えの多い食慾不振、夜泣きなどについては、あらかじめパンフレットを作っておきこれを個々の訴えに応じて母親に手渡せば保健指導の手数が省けるとの助言があった。

最後に、要は我慢づよさを育てるという育児が大切だと思いと結ばれた。

この後、会員の先生方よりO脚、夫婦共稼ぎ家庭の兄の病気、入浴の禁忌範囲など活発な質問が続出した。

当夜は講師のユーモアをまじえた巧みな話術と、育児哲学をおりませた平易な解説に魅了され夜の更けるのも忘れる程であったが、10時半頃散会した。(松田三樹雄)

### 阿伎留病院カンファレンス

阿伎留病院整形外科医長雲原博士から「大腿骨頸部骨折」のお話をうかがった。

老人ホームが増え、老人に多くみられる頸部骨折の例症が多くなって来た。その治癒もリスクが多い為困難な事もあるが、近年開発された「海綿状ラシ」「ムーア、ブレイト」等の使用によりその手術成果も上がり満足すべき状態である。スライドを示し多くの症例を教示された。又、診断の際、ただ単に下肢症のみの訴えの他疾患例えば坐骨神経痛と誤診する場合もあり得るので、患肢の自己挙上を試みるなど又X P撮影を行いその判断には留意する必要があるとの事であった。

出席者 森(実)、管井、岩井、大塚、清水、森(和)、鈴木(修)、近藤、中本、平尾、栗原(正)、小林、西村

次回、阿伎留病院カンファレンス 8月 20日(水) 担当 外科 管井医長の予定

(西村邦康)

### 映画のタベ

7月12日、午後7時より、学術部主催で「ピアイベントと学術映画を見る会」をバイエル薬品の援助を得て行いました。会員二十余名が集り、上映後も話が続き11時頃閉会致しました。学術映画上映をこれからも続けるため、フィル

ムリストを集めました。日本医師会、日研化学、バイエル薬品、吉富製薬、帝国臓器、大日本製薬、三共製薬、日本メルク万有、エーザイ、日本レダリー等のフィルムリストがあります。このフィルムリストの中で会員各位の上映希望がありましたら学術部迄御申込み下さい。(小林記)

次回学術講演会予定 9月26日(金) 午後2時  
日大医学部教授 萩原忠文先生

胸部疾患のレ線上の鑑別(難治性疾患を中心として)

### マムシ血清を置かざるの記

青梅総合病院 大橋 忠 敏

7月発行の会報第34号に、公衆衛生部の御知らせとして、マムシ血清常備医療機関の中に当院の名が挙げられていたが、これは何かの間違いである。当院では昭和36年8月から、マムシ咬傷の治療に血清を使用せず、セファランチン注射をもってこれにかえることにしている。その由来は、私が昭和28年頃、セファランチンの御本家長谷川秀治先生の門下である有福精一先生が院長をしておられた静岡県吉原(現在富士)市の吉原病院に出張勤務した時、マムシ咬傷にはセファランチンを注射するだけでよいと教えられたのに始まる。東京にもどって暫くマムシと縁が切れていたが、昭和35年に青梅に赴任して、またヨリがもどった。始めのうちは従来の慣習に従って血清注射、局所切開、過マンガン酸カリ液洗滌を画的にやっていたが、どうも面倒なので、「セ」10mg(2cc)の局所注射をするだけにして、ついでに切開も洗滌もやめてしまった。第2日以後は「セ」10mgを20%ブドウ糖20cc混合静注、これを経過を見ながら数日続けた。そのほかには、抗生物質、消炎抗腫張剤を適宜併用した。この方式に統一してからの成績をまとめ、血清使用群と対比した結果を昭和46年雑誌(大橋ほか:診断と治療、59(5):931~936,昭46.)に発表した。

要するに血清群と「セ」群との経過予後の間にほとんど差異は認められなかった。そうなるで使用

# 特集 終戦前後

## 父の死と終戦

岸 田 荘 一

昭和20年8月14日終戦の前日に父は疎開先の田舎で死んだ。病名は老衰であったが、栄養失調もあったと思われる。電報を受取って馳けつけたが、途中空襲警報に遭ったりして着いたのは15日の早朝であった。遠い村はずれの焼場へ遺体を運んだが、竈も不完全で焚くのも薪であったから、骨になるのに数時間かかるということで、一応戻って来た。

ここで天皇の「終戦の詔書」朗読をラジオで聞いた。何分にも異常の興奮状態であったし、雑音も多く、天皇の口調や抑揚も変っていたから、終っても何のことかよく分らなかった。しかし大方が予期していた「戦争は苛烈であるが、一層奮起を望む」といった風の激励でないことだけは感じられた。暫らくボカンとしていたが、誰いうとなく、日本は敗けたのだ、無条件降服するのだとの解釈が出て、そんなことはあるものかと頑強に主張する一派とがやりあった。時間が経つとどうやら敗けた方が本当らしく思えて来た。フト見ると炎天下の垣根の下で大きな蛇が蛙を呑み込もうとしているのがイヤに毒毒しく見えた。

しばらくして私達は父の骨を拾いに行ったが、何か父に済まないことをした気持で一杯になった。私は学校を出ると陸軍の短期現役軍医を志願して入営し、昭和13年には出征して、引続き召集の形で満6年間に戦地で過ごした。折からの戦況からして太平洋の彼方で玉砕する部隊も多いので、私はもう帰らないものと家では思っていたらしい。それが昭和19年も10月になってから単独で帰

還したので、父は殊のほか喜んだ、ところが父はそれから急にボケ出した。耳が速くなったこともあるが、何か辻褃の合わないことを云ってみたり些細なことで怒りっぽくなった。心なしか足許もあやしくなったようである。

無理もないことかも知れない。私には兄弟が多く、年令もあまり差がなかったので、これらを皆学校へ入れて教育を受けさせることは中学校の英語教師であった父にとって並大抵のことではなかった。学校の授業の他に家庭教師や個人教授を出来るだけ引受けて年中無休で寸暇もなく働いた。好きな酒も母の顔色を気にしながら小さくなって飲んでいった。最後の弟だけが大学へ行く頃はやっと余裕が生じて、これからいくらか楽が出来るようになるかと戦争がひどくなったのである。

それでも父は仕事を多少でも続けたかったようであった。が何分にも食物その他の物資がますます窮して来る上に、寒い冬の間毎夜の如く敵機の来襲にあって眠れず、戦災者の悲惨な姿を見ると、到底東京には居られまいと考えて、母と共に説得して田舎へやったのである。慣れぬ生活は却って生命を縮めたかも知れない。

東京ではその後何回も空襲があって一面の焼野原になったけれども、不思議なことに私達の家は焼けなかった。幸運であった。焼けないのであれば父もどうせ死ぬなら東京で死なせればよかったと悔やまれた。

それにしても何時どういうことになるのであろうか。何処から伝って来るのか、その夜にはもう米国の軍艦が横浜に現れて、米兵が既に上陸を開始しているとか、更に陸海軍の料校であったものは皆銃殺されるであろうとか、婦女子は総べて米兵その他に強姦されてしまうであろうとかいう噂も流れて来た。全く根拠のない話だとはいえない。

日本軍だって戦地によっては随分ひどいことをしているし、米軍でも例えばガダルカナル島で不時着した日本の飛行士を飛行場の展成機の下敷にして「のしかか」のように殺したということだ。敗戦を知らないで死んでいった父は或は幸福なのかも思ったりした。

それはつい先日のことのような気もする。それから14年たって母も死んだ。昭和34年の早春であった。その頃から所得倍増計画とかいって日本は急に経済が繁栄した。今大東京のビル街や交錯するハイウエーから当時の灰燼に帰した曠野を想像することも出来ない。

## 私の釣日記

日立青梅工場診療所 井上文夫

六月十日(日)

この日、遂に、日立空襲さる。午前九時頃から約1時間。目標は海岸・会瀬両工場。全潰す。敵機約90、ネライは実に正確だ—中略—。500~1,000瓦爆弾550ケ、内不発4ケ。即死工場内約600、外約300、負傷約300、壕内生埋め死者320余。—以下略。

これは、私の当時の釣日記内の一コマである。当時は、節電のため、各企業毎に定められた休電日があり、その時は、前日9日(土)がその日で休日であったが、三笠宮殿下が工場ご視察のため、出勤日となり、翌10日が振替休日となった。この変更には、敵も気付かなかった。お蔭で、この程度の人的被害で済んだが、死者の中には、部長級が多かった。私の釣仲間も居た。当時、空襲警報発令の節は、部長級は、各自その職場に、馳せ参ずることになっていた。

私は、この日も鮎釣りにかけていた。午前3時過ぎ日立発上り列車で、水戸乗換え、水郡線沿線袋田温泉手前の久慈川で、囃鮎を泳がせていた。敵の爆撃機と思われる大編隊が、頭上高く北上するを見た。稍々あって、物凄地鳴りが唸った。最寄駅の駅長から、工場全滅と常磐線不通を告げられた。帰路は、幸い、1つ手前駅まで開通して

いた。夕やみ迫る頃、徒歩で、漸く帰宅したが、工場内防空壕の生埋者の発掘作業が、随所で、行われていた。その夜は、徹夜で、救出者の処置に専念した。越えて、6月13日正午、万三昼夜後の生存者が19名救出され、その中に、医務室勤務の看護婦2名が居た。しかも、彼女等は、17名の男性を励まし、鉄カブトで、埋没土砂を掘り続けていた。その後1ヶ月以上も、遺体が断続的に掘り出されたが、ついに確認され得なかつた犠牲者もあった。

七月十七日

午後11時頃から約1時間、敵の艦砲射撃をうく。北は高萩、南は勝田、中心は日立。外は物凄く集中豪雨。被害は工場周辺の民家に集中。わが家には破片3ケ、屋根を貫通。病院は本館略々無事、3つの病棟は全滅(入院患者は疎開後で無事)。看護婦寮に直撃弾1発命中し、3名即死。以下略。

七月十九日

夜11時過ぎから約2時間、約100機による焼夷弾攻撃を受く。日立市は、僅かの周辺を残し全焼す。わが家は、延焼防止に成功。病院は、鉄筋の本館のみを残し他は全焼。但し、人的被害なし。来院火傷患者百数十名。

八月十五日

世界歴史を一変し、我国悠久3千年の歴史に一大汚点を印す新事態発生す。即、陛下は、和平詔書を下し、政府をして、ポツダム宣言を、受諾せしめらる。戦ついに我れに利非ず。8月9日ソ聯参戦と同時に、敵が初めて使用せる原子爆弾、—中略—敵は、本土上陸を要せずして、大和民族の根絶を期しうることを明らか—中略—日清・日露の戦捷以来、本来の民族性を忘却せし大和民族は、ついに、自らの刀に倒るといふも、過言に非ず。ここに、この戦訓を生かし、国家百年の第一歩とすべきであろう。

八月二十日

陛下の仰出により、正午から燈管中止さる。

八月二十一日

艦隊射撃以来の断水漸く復旧す。回生の思い。

九月二日

降伏文書の署名(帝国代表重光・梅津)。於米艦ミズリー号(横浜港沖六哩)。午前九時。

大東亜戦争は終結したが、百年後、桑港沖合で、彼我その立場を逆転する歴史的な一日のあらんことを期しつつ、この戦争に対する余の終止符を附さんとす。

これら三十年前の記録を見るにつけ、思い出はそれからそれへと、走馬燈のように、脳裡を去来するが、筆舌で表わすには、あまりにも惨であり酷である。せめてもの慰めは、アユ・ヤマメの跳る溪流のせまらぎを包む大自然の雰囲気に酔う己が姿が、日記の、そここゝに、感じとられることである。

末尾に、昭和十九年度釣果—ヤマメ205、アユ13、全二十年度—ヤマメ104、アユ7。空襲その他で殆んど出漁せず。と添書がある。

(50.7.7)。

## 高校一年の思い出から

石井好明

敗戦の年、僕は旧制高校に入った。当時、進学と云うことは、勤労働員の行先が変わると云うことだった。吉祥寺から井の頭公園を抜けて、三鷹の日本無線で「電波兵器」のハンダ付けをやって居たのが、亀有から牛蛙の鳴く田圃を横切って、日立の巨大な船舶用歯車製造工場へ旋盤工見習として通うことになったのだ。あの夏、駅の階段を上る時、脚気の足が一步一步重かった、その重さを想い出す。工場の中は薄暗く、大きな機械が僕を脅した。外はいつもカンカン照りで、道端の草は埃っぽかった。国の将来も自分の将来も視野に無く、目は足もとを見るばかり。毎日毎日が、重い足を引摺って駅の階段を上っているようなものだった、もう少し、もう少しで上りつく、と。「玉音放送」も亀有の工場内で聞いた筈なのだが、あの日も工場の中は薄暗く、外はカンカン照りだったと云うこと以外、具体的な記憶はない。

我々の高校は、戦時教育の一環として檜原村の笹平に寮を作り、生徒を合宿させて営林作業を実習させていた。入学して間もなく、我々も行くことになった。拝島を出た短い列車は、蒸気機関車

にひかれて五日市駅に到着。表通りに井戸がある古びた町並みを通り抜け、十里木の広い河原で休み、本宿の小学校の庭で休み、雨秋川をさかのぼって行軍した。緑の季節、工場労働の薄汚れた毎日に馴らされた目には、山家の庭先や破れ障子に至る迄山川草木見るものすべて、平和で新鮮で美しくなつかしかった。昼は山林の下草を刈り、夕べは溪流で鎌を研ぎ、大皿に山盛りのライスカレー（誰がどうやって手に入れてくれたんだろう？）を食べ、夜は寝床に入ったまま、オオンウォーンと響くB29の爆音を聞きながら、爆弾が降ってくる心配もなく安眠した。ほんの短い期間だったが、夢のような日々だった。

空襲で校舎を焼かれた我々は、戦後、他校の寮に間借りして、復員した水兵服のドイツ語の教授の講義も始った。幸い、書庫が焼け残ったので、読むものだけはかなりあった。ファイヤーストームの踊りの稽古は、腹が空くのでことわった。記念祭の柔道試合には引っぱり出されて、2回も大外刈りをくらい、レトログラデーアムジーンを体験した。あれは脚気の為だったと思うことに居る。

※ ※ ※

上田登代一

死から身を守る為と信じ海軍委託生を受け裸眼視力で落ち、肺結核のくせ徴兵検査だけは第二乙、続く陸軍短現は血沈値で落ち二等兵の懲罰召集嫌さに軍医予備員志願、京城20師団（内乱に備え関東軍に次ぐ強力師団とか。後ニューギニアにて全滅。桑原／桑原／）に25日入隊で軍曹。召集戦死でやっと少尉。同級生の殆んどは死ぬと大尉。馬鹿くさくて逃げた先が卒業前に採用済だった華北交通。時に昭和18年12月。時期はづれに飛び込まれて会社も何処にはめ込むか思案の末、北京（ギネ医長元福生病院長宗像先生）天津、青島のギネ医員は満席、流れ流れて北支山西省太原市へ。8月15日例の玉音とやらをそこの鉄路医院産科病棟で聞き心の中で万々才を叫びました。これで生れ故郷の東京へ帰れるんだ／銀座のメチ公が待っている／と。そこの院長は慶応の細菌出の

村瀬渉先生、彼氏に好かれ細菌室長も命ぜられ副論文一つを作れました事今でも感謝しています。副院長とギネ医長には反対に可成り嫌われました。小児科には慶応の元応援団長今都医で活躍している片田正武氏が居られ、同じガーゼ一枚で赤ん坊のよだれ受けと「あの後始末」とに併用せよと御教示を受けましたが物のない頃御親切な忠告と申しませうか。薬局に長崎薬専出の台湾人の親友が居り彼には大部おどされました。閩錫山軍が入城して来たら君は軍法会議でやられるぞ。妻子の居るくせに中国人の未婚のブレ(16才?)とキュッセンしたんだから…と。たったその位の事と思われでしようが商売女は別としてあちらの女性は日本人に対し仲々恋愛的感情を持って呉れずブライドが非常に高くキュッセンは一大難事でした。いざ入城するとそれは全くの杞憂で軍人の武装解除さえ無く略奪暴行も一件も無く反対に金さえ出せば病院の食堂で昼間から高粱酒が飲み美味しい中国料理が喰べられました。私の社宅には北支派遣第一軍司令部の主計中尉等や部隊付軍医中尉等の他に終戦を境に例の台湾出身の親友のお蔭で中国人医師等も良く飲みに来て呉れました。陸軍貨物廠の主計中尉も友達だったので彼と組んで軍の不要品(主として綿布)と軍の引揚げに必要な品(染料蠟燭等)を交換し大いに差益で儲けました。昭和21年佐世保に上陸した時は家族三人手皮オーバーに皮製トランク、一寸した洋行帰りの風情でフラウの天然ポケットにはナルタンがスキンにくるまれて鎮座ましましてました。暗い敗戦故否その救い様のない暗さ故にこそこんな仇花の狂い咲きも許されて又良かったのではないでしようか。25才の若さは敗戦さえ楽しいドラマにして呉れました。たとえば引揚船の中でさえ恋の花が咲きました。嗚呼それなのに今は!! 税務署と医療事故に脅えつゝ残るは老醜のみ。

## 終戦時の思出

江口 二三男

作業終へ夕かたまけて入る野風呂の  
寒きに慣るる日を悲しまず

この短歌は、敗戦後支那飛行場(元日本軍使用)寛橋と言う所に行き、その作業隊付軍医の時の短歌、聯隊新聞文芸欄発表、「寛橋草原」二十首の中の一詩である。

日本は負けた。負けるべくして負けた。来るべき運命が来ただけの事である。

寛橋飛行場と言うのは、中支の杭州と寧波の間にある余曠と言う町から、数里離れた所にある。毎日兵隊は、地ならし、飛行機防壁くずしをしたりして、支那軍の為に働いていた。それは昭和二十年秋から冬の作業であり、秋は周囲が草原であり、冬は枯野となった。その枯草を、風呂炊く薪など無いので、一ケ小隊の兵が一人一人刈って帰る。そしてドラム罐で露天風呂を炊く。そして順番に入る。一人が入るのに三人が火を絶やさぬ様に枯草をくべる。温まって汗を流してさっと出る。又次の者が入る。いくら一時温まったとは云え、それは寒かった。それが冬の毎夕の事であった。その時の歌である。

満洲に妻子を残し、応召し、(私は満鉄に勤めていたので)、何時日本に帰れるか、かりに私一人日本に帰っても、満洲の妻子はどうなるのであろうか。自分の事より満洲に残した妻子の事が心配であった。

年が明け昭和二十一年となった。私は四月三日に日本に復員した。生れて育った東京下谷の家は戦災で灰塵に帰し、家族(母、兄夫婦達)の姿はなかった。ようやく市川に疎開していた母、兄達を尋ねたが、満洲の妻子は未だ帰っていなかった。

私は大学を訪ね、恩師に会い、その紹介状を持ち、重い心で、先輩を訪ねる為、見知らぬ東山形へ旅立った。妻子の帰国を待つために。

幸に、妻子は私より四ヶ月後、八月末、兄の家に無事帰った電報を受けた。

※ ※ ※

葉山 侃

繰上げ卒業、入隊、当時私は台湾の南部、高雄の近くの左營にあった海軍病院に、海軍軍医見習

尉官として勤めていた。私の入隊の頃より母が病に仆れ、台北市内で斗病生活をしていた。その母が危篤になったとの電報を受けたのは、終戦の数日前だった。軍より許可が出たので私は台北に向ったが、着いた時は母の意識は無くなっていた。終戦の詔勅は昏睡状態の母の枕辺で聞いた。暑い日だったように記憶している。その日の夕方、母は亡くなった。今後どうなるか判らない時だったので、取急ぎ葬式をすませ、台北駐在の海軍武官府よりの通達で、大急ぎでまた海軍病院に帰任した。台北と高雄の間は相当の距離があるのだが、その往復の様も記憶にない。終戦のショックが余りに大きかったので、他のことはすべて影がうすくなったのか、十年一昔と云うならば三昔の長い時間が記憶をうすれさせるのか、当時のことはすべてはっきりとは思いつけず、次第に忘却の彼方におしやられてゆくような気がする。

## 終戦の想出

速水 完一

「愈々最後の時が来た。吾々は来攻する米軍に対し断乎決戦を挑む事になった。諸君も俺と一緒に死んで呉れ、吾が神州は……。」てな調子で烏滸がましくも拾数名の部下に訓辞をしたのは、丁度30年前の8月15日であった。当時私は九州の山奥の人吉海軍警備隊の軍医長でした。

此処に来る前は駆逐艦(桐)に乗っていました。此の艦はフィリピン沖海戦レイテ島輸送作戦と転戦も再三危い目に遭い乍ら九死に一生を得て帰還、更に大和と共に出撃の寸前、艦内にパラAを多発し、広島湾内の三つ子島(検疫所)に隔離されて了いました。其の防疫作業中に転勤命令があり、5月の始めに赴任しました。

当時此処には航空隊があり、予科練生(整備科)の教育も行われていたが、特攻訓練中の赤トンボ(練習機)位しか使用されず、専ら特攻兵器や松根油の製産に総力を挙げて居りました。

7月に入ると此の航空隊も解散となり、新に警備隊が編成されました。部隊は地元出身の兵を中

心とし、隊長は四国出身の老犬尉、私も其所に軍医長として留任させられました。従って隊の主力は、15、6の少年兵で、装備も訓練も不十分な頗る頼りない部隊でしたが、若さで張きって居りました。

かくて8月15日を迎えたのです。それは暑い日でした。正午に重大な放送があると云うので全員ラヂオの前に整列して聴く事になりました。併し期待された玉音はピーピーの雑音で終始し、何が何やら、さっぱり判らず、どうせ「古今未曾有の国難に当り、国民の一層の奮起を求む」位の事だろうと察し、午後は予定の隣部落での有力者との懇談会にも出席して了いました。其の宴席の空気がどうも妙なので、村民の間で交わされるヒソヒソ話の間に「敗けた」、とか「終わった」とか聞き捨てならぬ言葉が入ります。聞き正して見ても誰も判っきりしたことは判らない様です。私達は之等を否定し乍らも釈然とせず、早々に切り上げ隊に帰りました。隊の方にも上からの通達もなく唯騒然として居りました。其処へ大分の司令部から連絡将校が飛来、始めて命令が通達されました。それが何と、「各部隊は決戦態勢に入れ、九州地区は最后迄闘う」との事でした。瞬間さっと緊張感が流れ戦闘準備にかかりました。私も始めて拳銃と実弾を渡され奮起し、頭書の訓辞となったわけです。後で知ったのですが、司令部では長官が終戦が決ってから特攻機に乗り沖繩に突込み、後を追って7、8機が行を共にしたそうです。其の際機上で残した、「後を宜しく頼む。」の一言を巡り大騒ぎになり、鷹派は「長官の死を無駄にするな、最後まで戦わん」とし、鳩派は「此処は一旦鉾を収め、日本の再建に努力す可し」と解釈して論議され、先ず鷹派の命令として我々に戦闘準備につかされて了ったわけです。だが一夜明ければ鳩派の力が他を制し、情勢が一変しました。降伏を受け入れ、部隊は原地に於て武装解除となり、兵は翌日の正午迄に離隊、士官は夕刻退にとの解散命令が通達されました。但し先の特攻に対し米軍から何等かの報復があるやも知れず、士官達の身の安全は保障出来ないから身分を隠して出来るだけ遠くへ去れとの事でした。又当地に決戦態勢に備え蓄積された衣料・食糧其の他の物

(6)

資は、敵に取られるより日本人に分けてやれとあり、俄然大騒動になってしまいました。私も医療関係の物資を附近の医師達に渡す可く奔走しました。併しこの口達は嘘で、其の為四散した物資を取り戻すのが、半月后原地に戻った我々の残務整理の仕事になるとは、夢にも知りませんでした。

一段落してから我々青年将校は、元航空隊の士官食堂に集り最後の宴を張りました。飲むのは燃料アルコール、敗戦の悔し涙は制しきれず飲む程に酔う程に荒れに荒れ、用のなくなった兵食器を手当たり次第に従兵室の窓硝子に向けたまきつけ其のうっ憤を晴らし合いました。よくまあ眼がつぶれなかったものです。

翌日は愈々部隊の解散、延々と続く既に秩序なき兵の列を見送り、次は自分達の番です。我々には北海道・東京・大阪等遠方の者が多くいっそ軍の車で行こう、と云う事になりトラック一台と燃料タンク車一台が燃料満タンで仕立てられました。午後六時出発と決まり町の広場に集合した。回りには町の人々が見送りに集る、主に彼等の下宿の娘さん達若い人々で、贈り物の交換があり別れの言葉と共にきょう声が挙る。彼女等に用のない私は無然としてトラックの積荷の上で皆に背を向けて出発を待ちました。

やがて出発、球磨川沿いの難所を夜間強行突破し八代・熊本と進み、爆撃で破壊尽された都市の姿を夜目乍ら見せつけられ、敗戦の現実と悲惨さをしみじみ味いました。夜があけてから元氣も出此の儘北海道迄行けるぞと調子づいた処で門司に入り、憲兵隊の検閲にあってオジャン、軍の物を私用に供してはならんと車輛没収、相手は上等兵でも身分を隠した敗残の身は如何んとも仕難く、それでも駅迄乗りつけて下車、持って来た物資がものを云い優先的に汽車に乗り込みました。処が此の列車が行先不定、免に角行ける迄と乗り継ぎ乗り継ぎして二日かかりで東京に辿り着きました。

東京は勿論焼野が原、八代・熊本の比では有りません。併し幸に我が家は焼け残り、家族は無事ホッとして学校にでも顔を出そうとした矢先、「九州地区の海軍士官は原隊に復帰す可し。」というマッカーサー命令、否応無しに落ち行く先は九州相良、の人吉に戻り唯一人の医務科残務整理員と

して、無為だったが楽しかった約半年の生活に入りました。之が25才の一海軍々医大尉の終戦でした。

## 敗戦の思い出

丸 茂 三千穂

30年前のあの日は晴れた暑い日だった。

南部仏印のサイゴン郊外、約30軒のピエンホアで野戦病院を開設していたが、主計が師団司令部から帰って来て、声をひそめて報告した。

「重大な放送がありました。陛下の放送でしたが、よく分らない所がありました。併しどうも戦争は敗けたようです。」

台湾沖の海戦で多くの船を失い、比島、沖縄の敗けいくさ等々不利なニュースは沢山あったけれども、よもや敗戦とは不思議に考えたことがなかった。

「ショック」だった。

此れからどうなるのだろう。不安な思いが湧いて来た。将校は全員銃殺とか、婦女子は暴行されてしまふとか、等々どこからともなく「デマ」が流れ、又消えて行った。

それから10ヶ月の月日が過ぎ、昭和21年5月葛城という、2万屯位の航空母艦（但し飛行甲板の真中に直経15米位の直撃の跡があった。）が迎えに来て呉れる迄、何ともいふような無い日々がつづいた。

9月になると英軍の師団が、我々の武装解除に上陸してきた。武器引渡しの式が行われ、英軍の少佐の大隊長に敬礼をして軍刀、拳銃、双眼鏡等を差出した。

間もなくベトナム独立軍が台頭した。それと共にフランス人が殺され始めた。その死体がサイゴン河に投げ込まれ流れて行くのが見られた。

イギリス人も巻きぞえで殺されるものもあった。又日本軍将兵の一部の者が隊を離れ、ベトナム軍に投ずるものができた。

英軍、仏軍とベトナム独立軍との間に局地戦が行われた。治安維持の為、日本軍に再度武器が貸

与された。

迎えの船はいつ来るか分らず、いらいらして味気ない日々が流れた。麻雀、囲碁、花札等が盛んに行われた。

内地の爆撃による被害は思ったより、ずっとひどかったらしい。戦争中一番楽と思われた満洲がソ連軍が入って来て一番の貧乏くじを引いた様だ等のニュースが追々と入って来た。

此の様な日々が過ぎた後、昭和21年の3月頃、英軍の命令で近々来る船に乗る準備の為サンジャック岬の近傍のラジャーという部落に移動した。

そこで今でも忘れ難い二つの事件が起きた。その1つはアメーバ赤痢の流行であった。患者の1人が手厚い治療にもかかわらず死去した。成績の良い温厚な、働き者の軍曹であった。皆涙を流した。

第2は或る夜1人の伍長が急死した。治療に当った軍医の話によると急性の心臓死であるという。てい重に吊って、事は終った。併し後になって分った所によると、袋叩きにあって死んだものという。かねて生意気で威張り屋で、鼻つまみであり且酒乱であったそうである。

かくして昭和21年5月葛城に乗船、いろいろの思い出を後に、戦火に荒されたとはいえ懐しい郷里に向って出発した。1週間で広島大竹に上陸、その2日後に復員した。

今回顧の文を書こうとし、ペンを取ると茫洋として霞の彼方を見る様である。30年は記憶すら水で薄めて了った。悲しいですね。(終り)

## 終戦の思い出

進 藤 利 定

やがて又、終戦記念日がやって来る。

今から30年前の西歴1945年8月15日……皇紀2605年と云う長い日本歴史の中で、最大未曾有の屈辱の日……。それぞれの年令層、直接戦争に参加した人々、銃後の護りについた一般国民、特に広島、長崎の被爆者の皆様、又アメリカ空軍の爆撃を受けた都会人等、それぞれの置かれ

た環境、職種等に依り、思い出も種々多様であろうと思う。

私は、昭和13年7月2日、召集を受け、奇しくも、昭和21年7月1日、満8ヶ年振りに帰還する事が出来た。

この間、上海を振り出しに、中国大陸を西に東に、又北支・中支・南支と転戦、又転戦。

幸いに武運を全うして、終戦後約1ヶ年目に懐かしの母国に辿り着く事が出来た。

私が、敢えて辿り着いたという言葉を使ったのは、他でもない。湖南省衡陽～上海間の行程は、決して平穩無事なものではなく、機関手は屢々列車を停止し、又その度に百姓一撥の襲撃を受け、その都度機関手に貢物を与えて、列車の速度を早めさせ、辛うじて危難を免れるという誠に苦難の輸送であったので、上海に着いた時は、やれやれ命拾いが出来たと云うホッとした感じてあったからである。

さて、佐世保に入港して満8年振りに眺めた日本の緑多き美しい山々は、中国の殺風景な裸山とは余りにも対称的で、今も尚忘れる事の出来ない楽しい思い出である。

私は、最初第一師団、第一兵站司令部に処属し武漢攻略戦を振り出しに、以後第一戦の直後で兵站業務に従事していたが、昭和19年4月、日本軍の敗色愈々濃厚となった頃、鉄道部隊に転属を命ぜられた。

軍隊と云う処は、申す迄もなく命令一下敢然として死地に趣かなければならないので、運命のまにまに命運を托して行動しなければならなかった。鉄道部隊は、当時大陸に於ける花形部隊で、特にアメリカ空軍の制空下に於て、絶えず、敵空軍の爆撃にさらされていたので、当然の事として私は、生還を予期していなかったのであるが、幾度も危機に遭遇しながら、不思議にも間髪を入れず、一命を取りとめた事は、全く天命の為す業としか私には思えなかった。之に引きかえ、又如何なる運命のいたづらか、或る真のやみ夜の晩、鉄道部隊牽引車で移動途中、橋梁が深い溪谷の河川中に墜落し、部下十数名を目前で失った悲しい思い出、軍医殿軍医殿と叫びつゝ細りゆくいまわの声は、今も尚、私の耳朵の奥深く刻まれて失せない。



心から一同の冥福を祈って止まない。

さて、私の応召8年間、私個人として失った数々の損失は測り知れないものがあるが、然し又、あの戦争に参加しなかったなら得られなかったであろうと云う貴重な経験と信念は、その後のわが人生に大きく役立っていると思う。

それは、敗戦後わが部隊は蒋介石正規軍の補虜となりその指揮下に入った。結局正規軍の使役として使われた訳である。ところが昭和21年1月頃であったと思うわが部隊は次の様な命令を受けた。「衡陽桂林間の鉄路撤収作業を3月末日迄に完了すべし。若し期間内に作業を完了すれば部隊を貨物列車で上海迄輸送する然らずんば行軍に依り上海に到るべし」以上の作業は鉄道操典にある平時1日の作業能力から推計しては到底不可能な作業日量であった。然し若し之を果さなければ上海迄行軍しなければならない、敗戦直後の支那大陸を約千軒も行軍する事は取りもなおさず死を意味する事であった。即ちわが部隊は生か死か熟れかの関頭に立たされた訳である。戦時中、第一線、銃後を通じて一億一心、協心、戮力、又総力戦と云う言葉が絶えず叫ばれたと思う。然し果してこの言葉が文字通り真剣に身を以て体験された方がどの位あるであろうか。私は残念ながら戦時中わが部隊に於ては一度も経験しなかった。わが部隊に於て本当に総力戦に徹したのは恥ずべき事ではあるが蒋介石軍の補虜となり鉄路撤収作業を命ぜられてからである。真の患者以外は兵種を問わず将兵全員が火のたまとなってそれぞれの作業場に於て血みどろ汗まみれの作業を続けた。当時の部隊将兵の顔は希望に輝き真剣味があふれていた。又戦時中よりも寧ろ患者数は非常に少なく、お互いに思いやり、いたわりあい和気あいあいとして戦時中に見られない楽しい生活であった。かくしてわが部隊は超人間的な作業量を全将兵の和と精神力と総力戦に依って命令通り3月末日迄に見事に完了する事が出来た。この尊い経験から私は人間の和と精神力そして人間相互の調和と協力が真剣に発揮された時は想像に絶する威力を発揮するものである事を熟々感じさせられた。昔のある偉い人が「為せばなる為さねば成らぬ世の中の……」と歌ったがその炯眼に心から敬意を表する。この

事は、我れ我れの事業経営或は集団運営の上に心すべき事ではあるが昔から云うは易く行は難しが世の常、一応私の体験談として敢て披露に及んだ次第である。一説を賜われれば幸いである。

## 懲罰軍医の思い出

坂本 保

八月十五日の朝、上級部隊からの通達で、見習士官以上は指定場所（どこか他部隊の建物らしかった）に集合せよとの事で磯二七七二八部隊古橋隊（波浮港分院だがこの文字は家庭への通信にも使用禁止であった）からは古橋軍医大尉以下八名が複雑な気持ちで参加した。そして正午からの終戦（と言っていた。敗戦ではなかった。）の勅語を聞いた。何かホッとしたような、一面がっかりしたような気持ちだった。他の七名も似たり寄ったりだったと思われた。何しろ特務中尉の一人を除いては皆、軍服を着たお医者さん（軍医とは少しニャンスが異なる）だったから。この中尉殿も一般の将校とは異り中々の通人、私達三人の見習軍医に対しても〇〇士官殿と呼び同僚的な態度で接してくれ、コチコチの将校ではなかった。こうして私は波浮の港で終戦をむかえた。今から三十年前のことである。

この前後の思い出を少し書いてみよう。

所謂懲罰召集。いつ頃からかよくは覚えていないが、日支事変の頃からか軍医予備員制度が出来て、愛国心のある？医者は全部志願させて、二週間位教育して召集解除、軍医将校としてブールしておき、軍の必要に応じて戦線その他にかり出す仕組であった。大太平洋戦争が景気悪くなってからこの志願をしない医者は軍医要員として召集し二等兵として一ヶ月教育され、そのあと強制的に軍医予備員を志願させられた。この一ヶ月の一つ星生活が懲罰の語源らしい。私もその一人として二十年三月一日に召集令状が来て、我孫子で一ヶ月間、オイッチニをさせられた。一つ星の悲しさ他の兵隊に会えば所きらわずこちらから敬礼しないとビンタもので、一事が万事こうした懲罰生活で

大分苦勞した連中もあつたようだが、幸に私の所属した隊の教育係の兵長さんは物の分つた人で、時々営外教練に出た時など「お前達営内では二等兵として取扱うし、お前達もそのつもりでいてくれ。然し営外では出来るだけノンビリさせてやる。戦地に行けば君達のお世話になることもあるかも知れんが、その時はよろしくな」言つた調子で、一ヶ月はあまり懲罰の感じはなかつた。

大島の要塞。六月六日再度召集、大島へ渡り泉津の野戦病院に入る。近くに大島で唯一の大砲が一門あつた。聞けば日清戦争の時使用したものを朝鮮から今度持つて来たのだそうで、台坐も何もない、射つても房総半島への半分も届かぬので放置されてるとのことだつた。

リンゴ箱のトーチカ。波浮港分院に派遣されてある日仲間の見習軍医と海岸へ行った時、リンゴ箱の底の中央に穴があけてありその上と左右に石が積んであるのを見た。近くにいた兵隊に聞いたら、この穴から銃身を出して敵を射つのださうな。支那のトーチカはコンクリートであるのにと、がっかりした。

電柱の高射砲。終戦後岡田港で内地帰還の船を待っている間に燈台のそばの高射砲を見に行つたら、何と電柱二本を合せて黒く塗り、空を睨んでいた。昔水戸藩で海岸へつり鐘を並べて大砲に見せかけたと笑話的に聞いていたが、水戸のは金でただただましである。同様のものが数門？三原山頂にあつたさうで、東京空襲の米機が何回か三原山を避けたがすぐレーダーで木製であることを知つて直行するようになったと聞いた。

終戦時の大島の残念な話を書いたが、戦争に敗けたのは大和魂の欠乏でなくて貧乏だつたから仕方なかつたんだとあきらめている。

## 終戦當時を顧みて

高水武夫

三十年前の八月十五日午後四時電話が軍司令部よりあり部隊長召集をうける。その翌朝全員集合、部隊長が終戦詔勅を厳肅な軍紀のなかで声ふるわ

せて奉読、全員声なかつた。只々皆の思いは「我祖国、我同胞は今どうして」「よくぞ今まで生きて居たもの」「やれやれこれで内地の土をふみ懐しい家族と再会出来る」一等等々複雑な気持で一杯であつた。

「ラバウル」は「おきざり」にされて、「トラック」「サイパン」「硫黄島」沖縄と次々に占領されて、内地は広島、長崎と原爆の洗礼をうけ、毎日各地で「B29」の大爆撃をうけておるとの報を漏れきいて「いよ」「いよ」最後かと半ばあきらめておつた時だけに皆の気持は表現出来ない程であつた。

誇り高さ十萬のラバウル将兵は皆五千町歩からの畑地を耕し稲や野菜を作り自給自足はげみつつ、累計三百七十軒の地下要塞を構築してその中に寝起きしたり、現有六〇〇門の火砲と十萬の将兵が各自手製爆雷を「懐」にして数千の敵戦車群に飛び込み水際撃滅の確信に燃えて日夜あの「ジャングル」の内で演習を繰返していたのが終戦となつたとき、三年間の汗水たらし努力が遂に決戦の用にならず終つてしまつたが却つて何か胸につかえていたものがすつとさがつていったやうな気分になつた。もう会えまいと思つておつた家族ともまた会い得る喜びのために今迄の労苦が「むさん」に消し飛んでしまつた感じだつた。

お蔭で命が助つたのだがなぜ「ラバウル」は「おいてけぼり」にされたのだろうか不思議でならなかつたが後から判つたことだが終戦後出版されたマッカーサー司令部の某参謀の著書の中に「ラバウルの孤立化」という記事があり、一九四三年中マッカーサーの参謀達は途方もない多くの陸軍力と空軍力とを本国から増援してくれるなら話しは別だが、そうでなければ「ラバウル」を占領する方法は考えられなかつた。それでマッカーサー、ハルゼ提督、豪軍のブレイミー將軍の會議の席上参謀達は「現有兵力では、このような堅固な日本軍陣地をどうしたら占領できるか、私どもには見当つかない」と報告したところ巻煙草をふかしていたマッカーサーは「からだ」を乗り出し「そんな堅固なところは占領しないことにしようじゃないかケニー將軍（航空軍司令官）君らの部隊で「ラバウル」を無力にしてもらいたい」と申し、

(10)

そうなったので参謀達は安心した」と記載してあった。それで漸く「おきざり」が理解出来たし又「ラバウル」が毎日定期便のように午前九時と午後四時に戦爆連合五〇〇機の空襲をうけた意味もなっとく出来た。だから「ラバウル」の兵隊は「お客様の来る時間だから壕に入って一休みしよう」と云ったものだ。

会議の席でマッカーサーが若し占領ときめておいたらラバウル十万の将兵は全員「ラバウル」の土となっていたと思うと、あまりにも運命の「いたずら」の恐ろしさに今更驚かされる。

茫々として三十年の時は流れ

兩十字星は今も煌く

それにも似て不滅の真情に生きて

今日祖国の復興をみる

喜びと共に英霊の功績を今更に思ふ

天翔ける英霊に私達は心からの礼拝を捧げる

昭和十六年七月夕方往診して帰って来たら二度目の赤紙が来ておった。第十四衛生隊本部附となり「関特演」と云う名目で夜間こっそりと満州へ渡り厳寒の地に於て々と二年間をすごし吉林省「敦化」第八方面軍司令官今村大將の隷下に入る大命を拝し昭和十八年二月十二日敦化を出発す。敦化→吉林→奉天→朝鮮に入り二月十五日釜山港出港→門司→佐伯湾に集合。佐伯湾で五隻の船団を編成し三隻の魚雷艇に守られ、側方には一隻の奇妙な型の軍艦が附添うて、一時間八「ノット」でゆく。敵潜水艦の影におびえつつ航行、漸く「アデン丸」（六五〇〇屯）パラオ島入港す、椰子林にかこまれた美しい珊瑚の島、南方特有の鳥達も人なつっこげに囀り、赤いブーゲンビリア「ハイビスカ」 「真紅のカンナ」 「黄色のカンナ」 「だいたい色のカンナ」 「原色のカンナ」 の一群が灼熱の太陽に向かって咲ききそっている常夏の楽園とでも云える島であった。

「パラオ」には方面軍より某少佐参謀先遣されており、軍衛生隊本部は輸送船を乗替え「ニューギニア島」、「ハウランジャ」に急行する作戦命令を少佐参謀より受領す。高野部隊長（故山本元師の

甥）は大命の目的地たる「ラバウル」に到着する前に一少佐参謀の命には服し得ない、即ち大命の変更に基づくものなら如何なる危険瘴癘の地でも水火を辞せないが、大命の変更なき限りは「ラバウル」に行く強い確固たる信念を示したので遂に参謀も兜を脱ぎ作戦命令を撤回したので我が部隊は憲兵隊、高射砲隊と共に再び三月十四日夕にパラオ港を後にして「ラバウル」に向う。この高野部隊長の岩の如き信念が我が部隊全員を内地帰還させてくれたものと思う。「ハウランジャ」行へ乗換えておいたら玉砕は明々白々だ。一人の人間の不動の信念が如何に人の運命を左右するか驚かされる。

「パラオ」を出港して暫く行くと司令艦から「前方に敵の潜望鏡発見警戒せよ」次いで水中爆雷発射の音響、更につづいて「本艦は故障、航海に堪えず、今より引返す……」の信号あり、心細きこと限りなかった。

波間に木の葉のように揺れ、殆んど姿の見えない駆潜艇の活躍で航海をつづけた。

赤道祭りも終わった翌未明、監視兵が「スクール」をあびて艦上にて水浴中の敵潜水艦を発見、同乗の高射砲隊が水平射撃を開始、やがて至近弾の威力で潜航してしまった。

十八日頃から小さい島影が見えはじめ十九日には「ニューアイルランド島」の細長い海岸線に添って椰子林がよく見えるようになり、やれやれと胸をなでおろした。

翼に日の丸のついた友軍機が護衛と歓迎をかねて飛来して来た。どの船からも手を振って「御苦労さん」と答えて感謝の気持でいっぱいであった。二三旋回して友軍機は姿を雨に消した。その直后雲の切れ間から敵機が突然降下して来て船団に五、六発の爆弾を投下、船は大きく動揺して船内は「ホコリ」で暗くなってしまう、船の両側に落下した爆弾の破片が我々将校が「マージャン」に夢中になっておった処へ飛び込んで来て「キモ」をつぶす。

二十日夕方ラバウル港ココボ沖に碇を降して仮泊した。その夜は敵機が一機二機と数回来襲して盲ら爆弾を投下した。地上部隊からは数条の探照灯が敵機を捕え、高射砲、機関銃弾が花火よりも美

しく飛び応戦していた。皆花火見物のつもりで見物しておった。

翌早朝「ラバウル」に上陸し、第八方面軍司令部に報告に行ったら、加藤参謀長から人を呼んでおいて御苦労とも言わないいきなり「お前の部隊は「ラバウル」に来る部隊ではない何故に「ハウランジャ」へ行かなかった」と大きな声で叱られた。「まねかざる客」となったわけだが後から聞いた話によれば我々の部隊が到着した数日前大船団が、「ニューギニア」へ向い、「ラバウル」を出港し途中にて全部撃沈され、加藤参謀長も頭にて来ておった時だけに、とんだ「とぼっちり」をうけたものだ。

お蔭で我が部隊は「ラバウル」に居坐ってしまった。我が部隊が半ヶ月前に到着しておったら撃沈された仲間になっておったわけにて、又々運命の「いたずら」に眼を廻す。

第六七兵站病院「ラバウル」患者療養所の一部兵舎を割当ててもらい一ヶ月振りに宿舍に入る。

数日後軍命令により第六七兵站病院、第八七兵站病院、第百三兵站病院を隷下に入り、衛生隊本部の移動治療班（班長由茅軍医少佐）はラバウル患者療養所を第六七兵站病院より引継ぎ患者輸送班（班長下村軍医大尉）は各病院と病院船団の患者護送業務に服することとなる。

いよいよ陣容整いこれからが我部隊の三ヶ月間の苦難と「エピソード」に富んだ「ラバウル」駐留となりますが月を改めて報告致します。

## 戦争とは悲惨なもの

小泉新策

終戦後の思出を書けとのことで、筆をとって見たが30数年前の記憶は、ぼうっと霞んで、今脳裡に残って居るものといえば、悲惨な出来ごとのみしか甦って来ない。折角の機会であるから、うすれた記憶をたどって書いて見ることにする。

先づ応召、医局4年目の夏、祭、第一野病付軍医見習士官として中支派遣となったのが、南京が落ち、徐州戦が終わった後であった。大別を越え、不

慣れな救護班長として、高品支隊付きで漢口攻略戦に参加、これが最初の体験である。漢口では砲声の轟く堤防の下で、悠々と、胸部砲弾創患者の平庄開胸術をやっていた少尉が居た。それが現東京日赤外科部長の幕内精一君であった。応城作戦から三河作戦に救護班で出された。三河作戦中少尉に任官した。やっと一人前になったのが嬉しかった。経界作戦では274担架を担ぐという負け戦さで、このとき番兵を戦死させた苦い思出がある。途中我が野戦病院長が戦死して屍を一日担ぎ、夜になって火葬に付した。その火を目標に、敵の重迫の狙い撃ちに会った。川一つ隔てた対岸に落ちて友軍の馬繋場が全滅した。人の運命は正に川一重である。長沙第二次作戦のとき、帰路山上に一個大隊が後衛部隊として残って居てくれた。追われつつ岳州に着着したときは敵と味方が入り交って居たが、別に殺意もなく黙々と共に行軍して郊外の物資集積場まで来ると、我れ勝に物資をかすめて霧散して行った。悲しいことには我々を護って居てくれた後衛隊は、遂に一人も帰って来なかったことである。

中支での思出の一つに函山陣地でのことがある。三浦環一行が遙々慰問に来てくれた。函山は長湯湖を隔てて敵と対峙して居た最前線の岩山陣地で岩の洞窟が兵舎であった。これまで一度も慰問の来たことのない極めて殺風景な所であったので兵達の歓びは大変なもので舐めんばかりの大歓迎であった。環は泣いてばかりいて、さっぱり歌がうたえなかった。

西多摩出身の福島少尉を三河作戦中に赤痢で後送したが後日再召集されて何処かで戦没されたそうである。南京関西門に集結して開設していたとき、栗原、川辺の両君が見習士官でやって来た。二ヶ月間、同じ釜の飯を食った仲間である。当時自分は最古参中尉であったので可成勝手がきいた身分であったが転出のときくさに紛れて、録々夫子廠見物も案内しずまいであったことが心残りである。雲南地区の風雲急をつけ、愈々両人と別れてビルマに派遣されることになった。呉松から出航、18日を要した迷航行の末、先づサイゴンへ、それからクノンヘン、バンコックと行軍、更に印緬鉄道にて奥地へ移送された。

(12)

行軍につく行軍、山岳重々たるアラカン山系の名も知れぬ高い山々をよじ登りよじ下って道なき森林地帯をひたむきに押しわけ押しわけ進んだ。山岳にかゝる手前で牛の背による輸送が不可能となったので、糧秣器材の集積を行い軽装備になって進むことになった。軽装備といっても20日分の食料と衛生器材では一人分30キロを越す重量でこれを背負っての行軍は大変な苦勞であった。愈々目指すインパル盆地が見渡せる地点に達した。山上を西北から東南に通じている広い街道があって到る処に障地が構築されていて、こゝからの前進を拒んでいた。師団本部はサンジャックで、又我々野病は街道を隔ててミッションで釘づけになった。インパルまで10キロの地点である。我々の右翼には烈三十一師団が進撃している筈であり、又左翼には弓三十三師団が前進しているはずであった。我々は、インパル街道直下の谷間で、動けぬまゝ、こゝで開設した。開設したといっても、林の中の斜面を利用しての患者収容である。雨期の雨は毎日続く、天幕も僅かの器材を被う程度、斜面の木株を利用しての木の葉の簡単な屋根が精いっぱいであった。その時のことである。患者を街道を越えて東方の高地へ移動の命令があった。独歩患者は使役として野戦倉庫から糧の移送につかせ、治療隊全員で重症者の担架輸送にかかった。沢山の担架を街道にかつぎ上げ、整列が終るか終らないかの時であった。速雷のような響きが聞えて来た。忽ち敵の戦車隊が轟々と接近して来た。動けるものは我々先に林の中へ逃げ込んだ。後には唯街路の傍に重症者の担架の長い列が残されていた。間もなく英軍装甲部隊が担架の側に留って、将校と下士官を見つけて捕虜として拉致し去った。抵抗したものはその場でたゞき殺された。数名のグルカ兵が担架の列の上へガソリンを撒布してまわって、走り出すや、担架の列に火が流れ、黒煙もうもう燃え上った。瞬間この世のものとも思われぬ、すざまじい叫び声が上がった。高地からじっと見下していた我々は患者が生きながらに焼き殺されるのを、まざまざ見ながら助けることも出来なかったのである。戦線は糊着状態で、一向に前進の見通しがつかない。毎日毎日豪雨が漸続的に降りつづいていて、

下痢やマラリア患者が頻発した。やがて糧秣も衛生材料も底をついて来た。日々に患者は殖える一方、負傷者の数も増すばかり、さりとて後送の手順もはかばかしくいかない。収容出来ないもので周囲はうづまる有様となって来た。

これまで数十日間コヒマ街道を制圧して持ちこたえてくれた烈師団が急に後退を初めた。飛行機の飛来も頻繁になって来た。

祭の戦線も大分混乱して来た。必死で抵抗をつづけて来たが、何分にも既に糧秣はつきて久しく、弾薬も完全に底をついた。補給のめどは皆目たゞない。愈々忍耐の極限に来た今は後退せざるを得なくなった。

野戦病院では、先づ歩行可能なものから後退を開始した。担送患者をそれにつづけた。

マラリア患者も下痢患者も杖を頼りにふらふらと退却を初めた。後退が毎日毎日続いた。負傷兵は創口を木の葉や草の葉で包んでいるか或は露出したまゝであった。創口には蛆がうようよと、白く湧いていて、喰いつく痛みに悩まされていた。死者が日に日に殖えて屍臭が全山に漂っていた。負傷兵達の被服はぼろぼろにちぎれ、靴は破れて素足に襪を巻きつけて居るもの、銃を捨て、防毒面を捨て、装具の一切を捨てて身軽になってよろめきよろめき杖に縋って退却する、その姿はすざまじいものであった。それでも大概の兵は飯盒だけは首にかけていた。一粒の糧も持ち合せていないのだが、空しく兵站の補給を念願してのことであった。

完全に制空権を握った敵機は間断なく機銃掃射と焼夷弾で病みさらばえる敗残兵達を完皮なきまでに傷めつけた。

後退するにつれて屍体の散乱数は夥しくなり屍臭が鼻をついた。被服を奪われて全裸となり泥水につかっているのが目立って来た。

部隊では比較的動けそうな兵達で、清掃隊を編成して屍体の処理につとめたが、及ぶものではなかった。幾日も幾日も録々食べていない。歯をくいしばって必死の後退を続けた。ふらふらである。倒れこめば、それまでたゞある。休んでは歩き、休んでは歩き、夜に日をついで幾日後退した頃、日赤看護婦一行がよろめきながら歩いているのを

見かけた。何も持っていない。唯首に飯盒だけをぶらさげていた。中を覗くと青い幾枚かの草の葉が入っているのみであった。「頑張れよ」と声をかけて見たが、返事が帰って来なかった。それほど、疲労困憊していたのである。

チンドウイン河までたどりついた。この河の渡河点で腰を下して居て耳にした話では先日、日赤看護婦16名は路傍で休息したまゝ息が絶えていた。服装にも別状はなく、並んで寝たまゝの姿であったと、唯ごとではない気がする。

チンドウイン河の線まで退却した祭も烈も弓も消耗が甚しくて再起不可能であった。師団の十分の一も生存者は居ない程であった。ここまで来ても依然として糧秣はない。

元気なものをすぐって抜刀隊を幾組かつくり夜陰、英軍キャンプに切り込みをかけて糧詰や食糧を強奪した。これより生きるすべがなかったのである。敗退せるビルマ戦線の收拾は容易なことではなかった。

幸いにも、幸運といわんか、この困乱收拾の為め軍次席参謀が大本営へ飛んだ。その時に主計一、軍医一同伴することとなり、その幸運の一人が自分であった。幸いにもである。

馳てこの郷土五日市に帰ることが出来、そして、八州部隊軍医として五日市で終戦を迎えたのである。

八州部隊とは郷軍か民間人との混成部隊であった。松根油を採ったり食糧増産奉仕や物資輸送や後方任務の部隊であった。

軍医であり、同時に民間医療の任務もあった。

こうした勤務が半年続いた。大本営発表の各戦線の噂さが巷に流れ初めて居た。自分も、このまゝでは、本土決戦になりかねまい。又ビルマ戦線のあの惨敗の姿がと、頭の中をかすめ去るさびしい気持ちで一杯であった。

8月15日の重大放送の連絡があった。

愈々本土決戦の大詔であるなど覚悟をきめてラジオの前に緊張して聴き入った。

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び…」とのあの無条件降伏の大詔であった。

本土決戦は予て覚悟の上であったのに、餘りの意外さに呆然自失、唯々慟哭を禁じ得なかった。

そして免にも角にも生あるものゝ上には平和が蘇って来たのである。

改めて、当番兵初め沢山の戦友達の冥福を心から祈らずには居られない。

## 終戦の日のこと

松原貞一

免に角、暑い日であったように記憶している。その時私は学徒動員で鐘紡中津工場(大分県)に行き、女子挺身隊の面々に囲まれ落下傘の布を織る織機の整備をやっていた。福沢諭吉の生地である中津市は、築城・宇佐の両航空基地にはさまれていたためか、グラマンも混え爆音の絶えた日とてなかったのに、その日上空に機影なく、何故か気の抜けたような静けさの中で、蟬の声だけが妙に印象に残っていた。とに角暑い日であった。広島・長崎に得体の知れない虚大な爆弾が落ち、一瞬にして都市が消滅したという話が流れ、その話の中に「原子」という言葉を聞いたような気がしているが間違いであろうか。危いのはB29が一機単独で来た時で、直ちに白い布を被って倉庫の中にかくれるようにと通達が出ていた。午後〇時、陸下のお言葉があるというので、私共は苛性ソーダの臭の充満している暗い倉庫の中がゾロゾロ出て行ったように思うので、多分その日は仕事はしていなかったかも知れない。沖縄が陥ち、本土決戦も間近かにせまっておき、米軍の上陸予定地と思われる日南海岸には、陸軍の機銃部隊が既に集結を終っていると聞き、「いよいよお前達も大君の為最後の御奉公をする時が来た。本学年も一ヶ小隊を作り、防衛の任に当ることになる。各自自宅の武器を………」と配属将校にアジられ、目に涙を浮かべ決意を固めた。「我国ノ軍隊ハ世々天皇ノ統率シ給ウ所ニソアル、昔神武天皇大友……」動員に出て以来忘れかけていた軍人勅諭を大声で唱えては、皇国の礎となる日のせまっていることを俄かに覚悟しなければならぬ日々であった。正午の放送は、九州という彼の地であったためか、雑音ばかりが五月蠅く、陸下の声らしいものは殆

んど聞えなかった。恐らく、本土決戦が目前にせまって来たので、国民一人一人決意を新たにするようにと、陛下より特別のお言葉があったに違いないと担任の物理学校出の教師が解説を加えた。しかし数時間後にはもう何処からともなく「戦争は終わった」といううわさが流れ始めた。私は蒸し暑いカヤの中で、涙を流しながら眠れない一夜をあかしたことを今も忘れることが出来ない。

## マノクワリにて

大河原 周

昭和20年8月私は西部ニューギニアのマノクワリのジャングルの中で終戦を迎えた。

同年4月連合軍の沖縄上陸以後戦争はいよいよ敗戦の様子が濃くなって来ると共に、私達は内地の混乱を思って毎日を不安な気持ちで送っていた。終戦の知らせは実はほんと密かに胸をなで下す様な気持ちであった。ともあれこれで戦争は終わったのだとわかった、今迄両方の地に島流しの様になって帰るべき故国を失っていた私達に、やっと内地帰還と家族に会える希望が確実に実現すると云う喜びの方が大きかった。

昭和18年10月短期間の訓練の後野戦防疫給水部付の軍医として召集されたが、後にビルマ方面から来る本隊が到着しなかったため、同時に編成された兵站病院と終始行動を共にすることになった。行先は西部ニューギニアと知らされると共に、前途の多難がしのばれた。

11月始大阪港を出発、6千7百トンの貨物船の船艙におし込まれ、2隻の貨物船と共に小さな駆潜艇に守られて、船団を組んで航海を続けた。途中で度々敵潜水艦の襲撃におびやかされながらもマニラ寄港後12月始めめざすマノクワリに無事上陸した。

マノクワリは当時のオランダ領西部ニューギニアの首都、入江にのぞみ対岸には高い山がそびえた風光明媚の地で、青く澄んだ熱帯の海に向かって緑の木の間に赤い屋根の建物の見える文化的な感じの土地であった。海軍によって占領後ニューギニア民政府が設立され、内地からの商社の出張所も開設されて、多くの民間人や女子事務員や看護婦の姿も見えた。当時は内地からパオ経由の民間飛行艇も往復していた。唯毎日正午には豪州基

地からの爆撃があったので、その頃は周囲の山の中に避難していた。こうした状況も19年3月以後戦況の悪化と共に民間人の引上げ後は急速に変わって行った。

私達の上陸当時の戦況については、開戦後日本軍は勢いによって南太平洋方面でガダルカナル・ラバウルの線まで進出したが、ここで連合軍の反攻に会って次第に後退を余儀なくされていた。そこで軍の企図によれば、西部ニューギニア方面で周辺に飛行場を建設し、航空勢力の増強を計ることによって強力な防衛線を確認し、敵の反攻をくい止めることであった。しかるに当時既に時期がおそく、敵に制空権をにぎられ輸送も意の如くならなかった。マノクワリには18年10月第二軍司令部がおかれ、兵站関係の施設は次第に整備されていったが、必要な戦闘部隊と飛行場設営部隊は少なかった。私達が当時マノクワリに上陸できたのは幸運で、その後上陸できたのは人員で5、6割で戦闘部隊は途中の海上で2、3回も敵潜水艦に撃沈され、殆んど着のみ着のままの状態であった。物資に至っては到着したのは3、4割で、ジャワ方面から送られた米その他の食料品も港の近くで沈められ、その後の食料不足を来す原因となった。それ以後は大発と呼ぶ小艇で夜間敵魚雷艇の目をかすめて密かに輸送する他なかった。

当時の目標が飛行場の建設にあったから、特に飛行場建設部隊の苦勞がはげしかった。建設部隊と云っても本来の工兵部隊は少なく、殆んどは臨時召集の兵隊と軍属が大部分で、他は青少年からなる台湾人義勇軍のみであった。機械もなくつるはしとシャベルで海岸の湿地帯をきり開き、さんご礁を整地してゆくので作業ははかどらなかった。日中は敵飛行機の爆撃と夜は激しいスコールに会い、宿舍の設備の余裕もなく、食事も充分にとれず昼夜兼行で作業は進められた。そのため体力の消耗も激しく下痢患者が多発し、特に細菌性赤痢が広がって行った。私達は上陸後各部隊を巡回し、衛生状態の改善をはかると共に飛行場建設部隊の赤痢予防につくしたが、その状況は悲惨なものであった。漸く19年春になって数ヶ所の飛行場が使用可能になっても、増強されるはずの我が飛行機はついにその勇姿を見せることがなかった。反対に前線では日本軍戦闘機は「マッチ箱」と呼ばれ、敵機との戦闘によってすぐに火がついて撃ついでに消えて行った。

昭和19年4月連合軍はオランダ領西ニューギ

ニア東端のホーランジアに上陸した。当地にあった数10機の日本軍飛行機は不意をつかれて、一戦も交えずに使用不能となった。更に5月始その西方のサルミ地区に上陸し、続いて5月末マクワリ北方2百軒のピアク島に上陸した。同島には我軍の飛行場もあり、陸海軍部隊も敵の上陸を予想していたので、南太平洋方面で初めての両軍戦車部隊の戦いが行われた。我が軍は洞窟に入って防戦したが、次第に戦況も不利となり約1万名の将兵も全滅した。19年7月始連合軍は晴れた日にはマクワリ海岸から海上に薄く見えるすぐ近くのヌンホール島に上陸した。数日間の戦いの後4千名の守備隊は全滅した。

この前後数日間の昼夜を別たぬ空襲の激しさはいよいよ私達の土地へ敵の上陸も近いと予想された。私達も戦闘部隊と共に配備についたが、上陸されればジャングルへ逃げ込んでも食物はなく、3日と生き延びることは不可能で、終に最後の時が来たことを覚悟しなければならなかった。然し連合軍はピアク、ヌンホール島を確保し飛行場を使用すると共に、幸運にもマクワリ地区へ上陸しなかった。19年9月連合軍はモロタイ島へ上陸すると共に戦局は比島方面に移って行った。

それは台風一過と云ってもよかった。それ以後は毎日私達の頭の上の高い空を何百機と云う連合軍の輸送機が日夜となく通過して行った。それは比島方面の戦いの激しさを想像させるものがあった。ただ時々戦爆連合機が突然空襲にやって来た。双翼のロッキード戦闘機の機銃弾が頭の上をばさばさと音をたてて飛んで来る。それでも戦闘機の場合おおいのある壕の中に入っていればよかった。恐ろしかったのはB24爆撃機の来襲であった。遠くからのあの特有のぶるんぶると云う音が聞えて来ると、私達はあわてて近くの防空壕に飛込んで空襲の終るまで耳をおさえてふるえていた。やがて遠くで爆弾の落ちる音が聞え、その音が次第に近づいて、ざーと云う音と共に近くに爆弾が落ち壕がふるえる。幾度か若しあの壕に入っていたら死んだという経験があった。その間に防空部隊は盛んに高射砲を打ったが、とても十分に防ぎ得るものではなかった。その度に周囲から多数の死傷者が出て行った。そしてマクワリ周辺のジャングルの中には多数の白骨が風雨にさらされていた。

敵の攻撃が終ると共に私達の長い本当の苦しい戦いが始まった。それは飢と食糧自給への戦いであ

った。19年6月当時マクワリ地区駐留軍部隊約2万3千名の保有食糧は約3ヶ月分であった。その後部隊のソロン地区への転進の結果人員は約半数に減少したが、これで今後数年間は生きのびなければならなかった。他の土地からの補給は期待できなかった。その時以来私達の命をつないでくれたのはさつま芋、それも内地で評判の悪かった沖繩100号であった。始めの頃はジャングルの中の食べられそうな植物を食べて見た。そして総ての仕事をなげうって開こんに従事した。毎日少しばかりの土地を耕しては芋の苗を植えた。そして次第にジャングルの中の大きな木を倒して畑をつくって行った。しかし土を掘るとすぐに固いさんご礁の岩が出て来た。ジャングルの中は殆んど湿地帯で倒すにも固い木が多くて苦勞した。夜は毎晩激しいスコールがあって、昼は激しく太陽が照りつけた。いもがある程度収穫の出きる様になる迄の数ヶ月間はいもの葉の雑炊にいものかけらと時々米の粒の見える程度の食事が続いた。その点は将校も兵隊も同じであった。その結果部隊では激しい労働と食糧不足によって急速に体力を消耗していった。そして更にマラリアと栄養失調によって次第に死亡者がふえて行った。

部隊へ診察に行くとき休養を要する患者は全体の半分以上に達し、しかも人員不足から動ける患者は農耕に引っぱり出されるので、患者を休ませることを部隊長に交渉に行くことが忙しかった。体力を極度に消耗しているのに、昨日迄はともかく元気で働いていた兵隊が夜のうちに誰も気がつかないうちに死んでいたりすることが多かった。マラリアの熱発のため脳症状を起し夜間ジャングルの中に飛び出して行方不明となる患者もあった。時々少し離れた部隊に泊りがけで行くことがあった。途中死臭がただよるので近づいて行くと死体があった。そこを通過する兵隊も死体を埋葬する余裕はなかった。

兵站病院も満員になって重症患者も収容できなかった。病室には栄養失調でやせてひよろひよろになった患者や全員むくんだ患者がいっぱいだった。マラリアの治療薬はかなり充分にあったが殆んど効果がなかった。病院の将校宿舎の物置きに鼠が沢山巣をつくっていた。夜、鼠取器をかけると面白い様に幾匹もかかった。朝になって病室にそれをもって行って誰かほしい者はいないかと云うと栄養失調の患者が皆手をあげた。そのうちの一番瘦せた患者にやると、喜んで病舎のわきに持



っていつて焼いて食べた。患者は弱ってくると激しい空腹を感じて、木の根でも何でも食べた。そして下痢が止らなくなって死んで行った。毎日死亡者が出て衛生兵も体力がないので死体を埋めにかついで行く人員が足りなかった止むを得ず病舎の近くに穴を掘って埋めて行った。宿舎の周囲を耕すために土を掘るとあちこちから骨が出て来て困った。

こうして急速にふえて行った死亡者も20年春頃になってさつま芋がとれてくると、次第に減って行って栄養状態も改善されて来た。この間の食糧不足のために1万2、3千名いた人員が最後には6、7千名しか残らなかった。さつま芋も漸く空腹を満たす程度にはとれて来た。熱帯地方では始めは種いもをつかったが、2回目からはいものつるを取って次々に植えて行くと4ヶ月位で大きくなった。その他に少量のタビオカとババイヤもあった。海水からも塩もつくり、火薬を使って魚もとった。

その間にも戦線は次第に遠ざかり、内地に帰る希望も無くなって行った。戦地において戦争の推移や内地の様子がわからないわけではなかった。当時、海軍の通信隊が内地の新聞社からのニュースを受け、それを毎日印刷して配布していた。それに時々司令部からは大本営からの秘密の情報が入ってきた。それは例の大本営発表の景気よい報道ではなくて戦況についてかなり正確な連絡と作戦指導の資料であった。

連合軍はフィリピン作戦を終えると、我が南洋群島を攻撃して、内地の空襲も次第に激しくなっていた。20年4月には沖縄列島に上陸、我陸海軍は総力をあげて攻撃したが、6月には守備隊は殆んど全滅して組織的な抵抗を止めた。そして7月には連合軍の本土上陸作戦が始まろうとしていたが遙か南半球に島流しされている私達にはどうすることもできなかった。8月6日広島に、次いで長崎に新型爆弾が投下され、その被害も予想外に激しいものであると報じられた。

処がその数日後から海軍からのニュース発行が止まり、同時に時々内地からの無線を傍受していた陸軍通信隊の無線機械も司令部から没収されて一切のニュースが入って来なくなった。内地の終戦を知ったのは終戦後2日位たってからであった。そして翌日病院長によって終戦の詔勅が読み上げられた。

私達には終戦前後の細かな内地の事情はわからなかったが、日本軍の全面降服は連合軍の内地上陸直後になるものと想像された。それはこんな事

態は強硬な陸軍が承諾しないと考えていたからであるが、既に戦力の殆んどを破壊されてどうしようもない処まで追いつめられたものと想像された。

終戦の知らせを聞くと同時に兵隊達の気分は急に明るくなって、もうすぐでも内地に帰還出来るものと思い、何時帰れるかと云うこと以外に話題はなかった。その後の内地のニュースはただ驚くことばかりであった。止るところを知らない物価とうきと占領軍による日本の改革とには、恐らく内地の人達も混乱にまき込まれているものと想像され、一層望郷の念にかり立られた。

その後の私達の生活は次第に落ちついたものとなって行った。20年11月からオランダ軍による武装解除が行なわれ、翌年1月以後市街の中心地にオランダ軍の1部が駐留したがその数は少なく、反対に日本軍は周囲のジャングルの中に今迄と同様に宿営していたので、敗戦と云う感じは少なかった。その後オランダ軍の将校から雑誌ライフ等を借りたりして破壊された東京の写真や地図等を見るに及んで、今更ながらその被害の激しさに眼をみはった。

私達があれ程待ち望んでいた内地帰還もうわさばかりでなかなか実現しなかった。やっとアメリカ軍の上陸用舟艇にのせられて名古屋港に上陸したのは1年後の昭和21年6月であった。

### あとがき 「終戦前後」によせて

私達は毎年8月になるとあの暑かった終戦の日を思い出します。早いもので今年は終戦後30年を迎えます。

終戦当時会員の多くは軍医として出征して、外地や内地で終戦を迎え、もっと若い人達は学徒動員や学童疎開の状況でした。

終戦後30年たった今日、当時の記憶も次第に薄らいで来ていますが、改めて色々の感慨をお持ちの方も多いと存じます。

会報の8月号で当時の記録について会員の寄稿をお願いしました。

〆切までに14名からの原稿がよせられましたのでそのまま原稿到着順に掲載しました。

これらの異常な経験は何と悲しい思い出ばかりであることか、原稿を拝見して胸がつかれる思いがします。又決して繰返してはならないと思います。

尚都合で〆切に間に合わなかったり、未完の原稿は来月号に廻します。(大河原)